2020 年 10 月 1 日　NO.53

untitled

http://www.kana-pie.com

「untitled」 肩書や、形にとらわれず、自由に広がりのある活動を目指して・・・

神奈川県社会福祉法人経営青年会通信

contents

新型コロナウイルスについて聞く　－医療的な視点から－
－コロナ禍に思うこと－　・・・・・１面
－コロナウイルスの行く先－　・・・・・２・３面
－コロナウイルスとくすり－　・・・・・４・５面
活動報告
－令和元年度第１回総会－　・・・・・５面
令和元年度卒会者のご紹介　－卒会者からのメッセージ－　・・・・・５・６面
お知らせ　－今後の予定・会員数－　・・・・・６面

新型コロナウイルスについて聞く
―医療的な視点から―

世界中に大変な混乱をもたらしている新型コロナウイルス。私たち福祉経営にも大きな影響を与えています。この状況について、田代会長に話を伺いました。

■ コロナ禍に思うこと

「コロナ禍」という表現は、いつからどこで使われ始めたのかが少し気になりました。調べてみると、古くは 1960 年代の「水俣病禍」などの言葉が見つかり、このような「病名＋禍」という表現は昔からあったということが分かりました。

とはいえ、「近年ではパッと思い浮かぶ言葉がないな…」などと思いにふけっていた時、30 数年前の中学校卒業時に同級生と交換した「サイン帳」に友人が記した一文を思い出しました。それは、『禍（わざわい）を転じて福となす』という言葉です。多くの日本人が好みそうな力が湧く言葉でありますが、ここでもう一歩踏み込んで「実際、どうしたら禍を福にできるものか？」と考えてみました。それにはまず、「禍を受容する度量があるかどうか」が肝心であるとの思いに至りました。すると、『これまでを振り返ってみると、経営にはたくさんの「禍」があったではないか』と「コロナ禍」である今の環境への肯定感が増し、「ひょっとするとこれはチャンスの到来なのではないか？」と、漠然とではあるが希望が湧いてきました。

田代会長

自分たちではどうすることもできない外部環境の変化に対して一喜一憂するよりも、自分たちで改善することができる内部環境、とりわけ衛生管理等の「サービスの質」に今こそこだわりたい。

これから先、利用者がその点を特に厳しく評価するのは明白であるからこそ、弛むことなく行き届いた衛生管理でこの「禍」を乗り越えた事業所に光が当たるはずである。

【神奈川県社会福祉法人経営青年会会長　田代　鉄也】

田代会長らしい前向きなお話でした。

本会には多種多様な資格や学識経験を持っている方が会員として活動しています。会長の言われる衛生管理等の「サービスの質」にこだわるためにも今回は医療的な立場から会員であるお二人に話を伺いました。

最初に、医師資格をお持ちの平本剛士研修委員長からお話をいただきました。

■ コロナウィルスの行く先

2020 年 1 月 15 日、日本で新型コロナウイルスの初の感染者を確認してから、すでに半年が経過しました。これまで緊急事態宣言などを経て現在に至るのですが、未だ収束を見据えることは難しい状況にあります。私たち福祉関係者も、利用者や職員の安全を踏まえ対応を求められています。今後どのようになっていくのか気になるところですが、専門家を含め医療従事者の中でも意見は割れています。現状を改めて振り返りつつ、一医療者として私見を述べさせていただければと思います。

新型コロナウイルス感染症は、いわゆる「風邪」を引き起こすコロナウイルスの亜型で、多くの場合無症状または風邪様症状を伴う軽症で自然治癒しますが、重症になると急性呼吸窮迫症候群や敗血症、多臓器不全を伴い死に至るケースが出てきます。統計を見ると、8 月 15 日時点で国内感染者累計数は 54,714 人、死亡者累計数は 1,088 人、国内致命率は 2.0%となります。同じコロナウイルス感染症であった 2002 年の SARS（致命率 9.6%）、2012 年の MERS（致命率 35%）と比べると、その致命率は数字としては決して大きなものではありません。しかしながら、未知のウイルスに対しての恐怖感、一定症例で重篤化が見受けらえること、その際の治療方針などが確立されていないこと、感染力の強いことを踏まえると、現状のような行動制限などの対策を迫られるのはやむを得ない状況かと考えています。

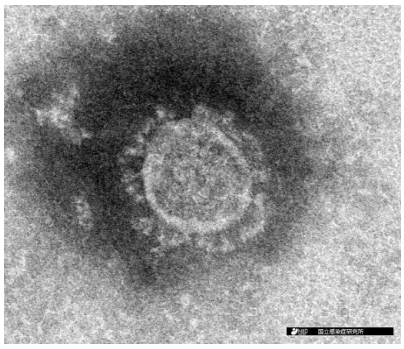
感染症に関して医療面からの対策を考える時、如何に発生数を減らすか（予防するか）、発症した時に如何に致命的な状況を防ぐか（治療するか）が問題になります。

平本委員長（医師）

治療の面からみると、新型コロナウイルス感染症の問題となる重症化は、免疫系等の過剰反応が原因と考えられており、現段階では治療薬としてウイルス増殖を抑制する「レムデシビル」と免疫による過剰反応を抑える「デキサメタゾン」が承認されています。このほか、適応外使用として 11 種類の薬剤が治験ないし特定臨床研究として用いられています。治療面としては、現状である程度重症化への対応はでき、最低限のラインは確保できていると考えられます。欲を言えば、軽症例で使用し重症化するリスクを減らせる薬剤が欲しいところです。作用機序としては「レムデシビル」が使えそうですが、副作用の懸念、費用としても一人あたり 25 万円程度（現在は製薬会社から無償提供中）かかるため、タミフル（2,700 円程度）のようなインフルエンザ治療薬と同じ感覚で使用することは難しいと思われます。既存の疥癬治療薬である「イベルメクチン」なども効果が認められており、そういった既存の薬剤の中から治療薬を見出せると、安全性も含め効率がよいので期待しているところであります。

予防の面から考えると、感染者を迅速に把握して感染拡大を防ぐ検査体制の充実、感染を予防するワクチン開発の２つが挙げられます。

検査体制の充実としては、安価でかつ容易に、精度の高いスクリーニングが行えることが目指すところとなります。現在もインフルエンザ同様に十数分で結果がわかる簡易抗原検査キットがありますが、症状が出ていないケースでは使用できず、また偽陰性になるケースも見られ、陽性者と陰性者を確実に分けることが求められている現状では確定診断に用いることが出来ない状況にあります。結果、陰性と判断するには最終的に PCR 検査を行う必要があるのですが、設備の問題から検査機関が限られてしまうことが問題になります。5 月中旬以降、これまで一部の認可された医療機関でしか実施できなかった PCR 検査等が、診療所レベルでも実施できるよう条件が緩和されました。まだまだ検査機器の納期の問題があるようですが、最近では徐々に検査可能な医療機関が増えております。検査体制は充実しつつあり、今後はより検査件数が増えると予想されます。母数となる検査件数が増えることを考えると、無症状ないし軽症の感染者数も増加することとなります。場合によっては私たちも感染対応を行う機会が増えることにつながるかもしれません。



コロナウイルス

最後にワクチンについてですが、現在 160 種以上のワクチンが開発されており、そのうち約 30 種が臨床試験に入っています。一般的に 5-10 年かかると言われているワクチン開発としては異例の速さで進んでおり、早ければ来春から夏にかけて日本でも実用化されるのではと言われています。ワクチンが実用化されれば、治療、予防の面で一定の対策が出そろうことになります。但し、新型コロナは季節性等がまだ不明瞭で、どのくらい流行が続くのかもまだわかりません。ワクチンによる抗体の残存期間も数カ月程度と言われており、実際にワクチンが実用化されたとしても、単回の投与では満足な効果を得られない可能性があります。また通常より短い期間、少ない症例数での認可となると、副作用なども問題も否めません。他のワクチン接種同様、副作用については国家賠償が行えるよう法整備を進めているところではありますが、不安は残ります。ロシアでは他国に先立って実用化する方向性のようですので、見守りたいと思います。

拙いもので恐縮ですが、コロナに関して私の知る現状と私見を述べさせていただきました。個人的には、ウイルスは根絶することは困難なものであり、ある程度共存していくしかないものだと考えています。あとは、どれだけの労力を払い、どこまで防ぐか、のバランスの問題だと思っています。厳しい話をすれば、ある程度の諦め、も必要だと思っています。今知られている情報から考えると、来春くらいには対策が出そろって落ち着くのではと思いますが、あくまでもスタートライン、そこから試行錯誤があって、理解が深まって、ようやく本当の意味で落ち着くのだと思います。長い道のりになると思いますが、皆さん頑張っていきましょう。

【社会福祉法人さくら会　平本　剛士】

最後に、薬剤師資格をお持ちの平本秀真会計幹事からお話をいただきました。

■ コロナウィルスとくすり

新型コロナウイルスの感染拡大は多くの介護現場に不安を与えています。早く特効薬が使えるようになれば少しは安心できるのに、と気を揉んでいる仲間も多いと思います。

そこで本日(7月末)時点のお薬の開発動向について私の知る範囲で解説させていただきたいと思います。

平本会計幹事（薬剤師）

まず、国は有効性と安全性を十分検証しないと新薬を承認しません。そのため、一般的に製薬会社が新薬を開発するには10～20年もの時間と300億円以上の費用がかかると言われています。また海外で承認されている薬であっても、同様に検証するために、日本で承認されて販売されるには5年弱かかると言われています。しかし、国民の生命及び健康に重大な影響を与える恐れがある疾病の蔓延その他の健康被害の拡大を防止するため緊急に使用されることが必要な医薬品について、医薬品の承認制度が日本と同等水準にある外国で承認を受けている医薬品を、迅速に承認する「特例承認」というルールがあります。以前新型インフルエンザが流行した際に、海外のワクチンが初めて「特例承認」されました。今回の新型コロナウイルスが広まった、2020年5月7日に政府は新型コロナウイルス重症患者に限定して「レムデシビル」を特例承認しました。なんと申請から承認まで要した期間は3日間で、これは前例となる新型インフルエンザワクチンが3か月を要したことと比べても奇跡的なスピード承認と言えます。

次に「デキサメタゾン」が日本で2番目の新型コロナウイルス治療薬に承認されました。前述の「レムデシビル」と同様に軽症者への有効性は確認されていないため重症患者に対してのみ適応となっています。口内炎治療薬である「デキサルチン軟膏」という製品名を聞けば聞き馴染みがある方も多いと思います。ただ、今回の服用法は内服および注射なので「デキサルチン軟膏」を口腔内に塗っても効果はありませんのでご注意を。

最後に、軽症患者への有効性が期待されていた「アビガン」はどうかというと、藤田医科大学で行われた臨床研究の最終報告が7月10日にありました。最終的には新型コロナウイルス感染症に対する「アビガン」の効果について明確な有効性を確認できなかったという報告になりました。しかし、同研究の責任医師である土井教授は「有効である可能性がある」とも評価しました。これは、事前に規定されていた主要評価項目の「ウイルス消失率値」を達成しなかったため、有効性を証明できませんでしたが、他に規定していた項目の「解熱までの平均時間」では通常投与群は遅延投与群に比べて1.1日ほど短くなったことが「有効である可能性がある」との評価になったと考えられます。土井教授は有意差の有無を検証するには2,000人単位の患者が必要となるため、現状の国内の感染状況では難しいと述べています。この臨床結果を受けて厚労省に申請を行うかは「アビガン」を製造している富士フィルム富山化学の判断となっています。

上記のように既存薬を転用する以外にも、国内外で新薬剤開発やワクチン開発の動きも広がっています。現在ではワクチン開発の方が一歩リードしており、すでに20種類以上のワクチンが臨床試験に入っている状況です。海外の方が開発が進んでいるため、海外で承認されたワクチンを再び「特例承認」する流れにはなるのではないかと私は考えています。人類がワンチームとなることで知恵と努力が報われ、安全な新薬やワクチンが一日も早く世に出ることを、いち薬剤師として願っております。

【社会福祉法人愛成会　平本　秀真】

皆さん、お二人のお話、参考になりましたでしょうか？

「私たちの実施している福祉事業は、現代社会の中で欠くことができないサービスである」ということは、コロナ禍の状況の中で改めて気付いたことの一つです。その大切な役割を担っている私たちが大変な事態だからと言って下を向いていてはいけません。志を同じくする仲間とこのような情報交換をしながら、多様化する福祉ニーズに対応できれば、きっと明るい未来が拓けると思います。

両平本先生、お忙しい中、ありがとうございました。

【総務広報委員　石川　友紀】

活　動　報　告

令和２年度第１回総会

例年６月に開催している総会は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、書面表決とさせていただきました。皆様にご協力いただき、第１号議案　2019 度事業報告(案)について、第２号議案 2019 年度収支決算報告(案)についてはそれぞれ過半数である賛成 62 で可決されました。

令　和　元　年　度　卒　会　者　の　ご　紹　介

本会に多大なるご尽力をいただきました令和元年度の卒会者をご紹介します。本来ならば、例年６月の総会時に感謝状を贈呈していましたが、今年は、コロナウィルスの影響のため、感謝状は郵送しました。

齋藤智範　様（公正会）　　山口美智子　様（若竹大寿会）　　伊藤俊吾　様（七葉会）
髙木麻里　様（長岡児童福祉園会）　古橋祐幸　様（中心会）　原田忠洋　様（清琉会）

この中から原田様と髙木様からメッセージをいただいていますのでご紹介させていただきます。

■　社会福祉法人清琉会　原田　忠洋　様

平成９年、現在の法人に就職し時を置かずして当時の神奈川県社会福祉青年経営者会に入会させていただきました。以来、多くの皆様に様々な場面でアドバイスや指導をいただき、また自法人の職務だけでは経験できないような貴重な機会にも多く関わらせていただきましたことに対して、この場をお借りし改めてお礼申し上げます。

社会福祉法人に就職した当初は、高齢分野も措置制度の時代であり、民間企業しか経験の無かった自分にとってはカルチャーショックのような日々の連続でありました。戸惑いながらも、目の前の事に一所懸命に取り組んで行く中、励まし叱咤激励してくれたのは同じ経営青年会のメンバーでした。

原田理事長

田代会長が以前仰ってましたが、「経営青年会は決して傷をなめ合うためだけでの会では無い」。時に厳しく、時には突き放し、自ら立ち上がることを促し見守ることは、相手の実力を信じているからこそできることであり、乗り越えた先に更なる信頼関係も構築されるものと思います。守りも重要ですが、若い時代だからこそ攻めることも経験する。そんな事を実感させていただいた在会時代でした。

経営青年会は卒会させていただきましたが、今後も社会福祉法人の経営を担う者として私自身精進を続けますので、会員の皆様におかれましても、くれぐれもご自愛の上、ご活躍いただけますことをご祈念し、お礼のご挨拶に変えさえていただきます。ありがとうございました。

■ 社会福祉法人長岡児童福祉園会　　髙木　麻里　様

“人々が美しく心を寄せ合うなかで、文化が生まれ育つ”という想いのこもった「令和」を、神奈川県社会福祉法人経営青年会において、人との繋がりを大切にしながら、互いを支え合い、よりよい社会福祉の構築に向けて研鑽を積んでいる若き精鋭の皆様には、心からのエールを送ります。

2007 年から入会し、初めて箱根の宿泊研修に参加した時には、温かく迎え入れていただきました。保育教育という現場への思いが強かった当時、「経営」ということを意識し、そして面白さを感じさせていただいた情報交換会では、福祉という分野で手を取りあって、社会をよりよくしていきたい！という熱き青年会に感激をしたことが思い出されます。

髙木理事長

2017 年 7 月に理事長となってからは、経営を目の当たりにして、もっと真面目に青年会に参加しておけばよかった～。と後悔しながらも、連絡してわからないことを聞くと、そのものずばりの回答のみならず、こうしたらもっとよくなるよ。と助け合いの精神が根付いていることは、自分自身も目指していきたい姿のお手本でした。卒会してからも、同じ経営者として、これからも色々とご一緒できますことを期待しております。

そして、感染症予防対策においては、各業種、各法人で今回工夫しながら乗り越えているノウハウを共有して、神奈川モデルとしての感染予防対応の形ができることを望んでおります。

阿部志郎先生から教えていただいた「一笑一若一怒一老」を日々心がけ、長岡こども園のモットーである「和顔愛語」で 10 年後 20 年後に 100 年後に法人が笑顔で存在できることを願い、神奈川県社会福祉法人経営青年会の未来永劫をお祈り申し上げます。たいへんお世話になり、ありがとうございました。

長い間、会の発展のためにご尽力いただきありがとうございました。今後のご活躍と所属法人の益々の発展をお祈りいたします。

お　知　ら　せ

今後の予定	11 月下旬～12 月上旬　ZOOM 研修～コロナ禍における施設対応について～
新入会員紹介	多川友広様（上村鵠生会）　小星直樹様（篤星会）
会員状況	92 名　法人数 72 法人（令和 2 年 10 月 1 日現在）

編集後記

皆様、コロナウイルス対策でお忙しいところ広報誌の作成にご協力いただきありがとうございました。今年に入ってからは、大きな活動はできていませんが、皆様とお会いし、情報交換できる日を楽しみにしています。
（Yuki Ishikawa）

発行／神奈川県社会福祉法人経営青年会
連絡先／〒221-0844
横浜市神奈川区沢渡 4－2
神奈川県社会福祉会館内
（福）神奈川県社会福祉協議会
福祉サービス推進部
電話：045-311-1424
Fax　：045-320-4077